

令和7年度長崎大学理学療法学同門会卒後セミナー報告

社会医療法人 長崎記念病院 リハビリテーション部

新川秀太(保健学科 17期)

令和8年2月7日、長崎大学医師薬学総合教育研究棟にて令和7年度長崎大学理学療法学同門会卒後セミナーが開催されました。今回は、畿央大学健康科学部理学療法学科の石垣智也先生より、「臨床をみがく症例報告～臨床への還元を目指して～」をテーマにご講演いただきました。その後の話題提供では、長崎大学病院の藤原優大先生と長崎記念病院リハビリテーション部の中川晃一先生より、運動器疾患および循環器疾患それぞれの症例を通して、臨床における評価・治療・効果判定のプロセスをご提示いただきました。最後のディスカッションでは、話題提供をされた2名の先生と参加者による活発な議論が展開され、終盤には石垣先生より、臨床報告の視点からより良い発表に繋げるためのご助言もいただきました。

石垣先生のご講演では、症例報告とは何か、事例検討との違いなど、耳馴染みのある言葉の定義や意味の説明から始まり、具体的にどのような過程で症例報告を作成していくのかを、先生が過去に発表された論文を例にご説明いただきました。特に印象に残った内容を2点ご紹介します。1つ目は、「1例から学ぶ姿勢が重要であり、反省（難渋例や失敗例）から学ぶ症例報告があっても良い」「1つの症例を通して新しい介入方法や臨床研究の種が見つかり、症例報告という過程を通して得られた知見が社会に還元されることで、患者さんへの臨床の質が向上していく」というお話でした。実証研究ではネガティブな報

告が掲載されにくいことが統計データで示されている現状も踏まえ、失敗から学ぶ姿勢の重要性について強調されました。臨床4年目の私自身にとっても、「症例報告は成功例でなければならない」という無意識の負担が軽くなるような感覚がありました。2つ目は、症例報告の目的を具体化する方法についてです。症例報告の準備段階で、「何を伝えたいのか」が曖昧になってしまう経験は多くの方が感じたことがあると思います。そのような状況を避けるための“研究目的（=核）を具体化するコツ”として、以下の4段階に分けて掘り下げる方法をご紹介します。1.「扱う問題は何か」、2.「その問題について、すでに分かっていることは何か」、3.「まだ分かっていないことは何か」、4.「意義ある報告の目的は何か」、これらを意識して検討することで研究目的が具体化しやすくなるとのことでした。実際に石垣先生らが執筆された論文もこの流れに沿って作成されており、内容に一貫性があり読みやすい背景には、このような目的の明確化があることが分かりました。

次に、話題提供①では、藤原優大先生より「重症運動器疾患患者における座位時間を確保することの意義」についてご報告いただきました。急性期においても早期離床を促し、身体活動時間を増やすことの重要性は知られていますが、重度で制度上の制約もある症例では、十分に身体活動が確保できていない現状があることを教えていただきました。その

うえで、経過が良好となった要因として「座位を確保すること」を挙げられ、患者さんが離床に前向きになれるような声かけやカルテ記載、病棟看護師との連携・スケジュール調整など、他職種と協働しながら取り組まれている姿勢が印象的でした。

話題提供②では、中川晃一先生より循環器疾患患者に対する理学療法についてご報告いただきました。身体所見や心身機能、退院後の生活状況を評価し、退院に向けた個別的な運動療法が唱えられている中で、「運動」だけでなく日常生活動作練習を取り入れ、身体活動量の増加によって良好な経過が得られた症例をご提示いただきました。入院中にめまいや吐き気が出現し、通常よりも身体を動かすことが難しい状況の中でも、10分間という限られた時間で、車椅子とベッド間の移乗など離床の機会を確保すること、また身体活動量計を用いてモニタリングしながら介入することの重要性を学びました。最後のディスカッションでは、石垣先生より、提示された症例を症例報告としてまとめる際にどのような点に留意すべきかご助言いただきました。

今回の卒後セミナーを通して、私自身が感じたことは、「目の前の1人の患者さんから、新しい医学的介入や研究の発見・開発が始まる」ということを忘れず、1人1人の患者さんに対して、臨床に出た日の緊張感を持ちながら、真摯に向き合い探究心を持って介入する姿勢を、明日からの臨床でより意識していきたいということです。

最後になりますが、ご多忙の中ご講演いただいた石垣先生をはじめ、卒後セミナーの企画・運営に携わってくださった皆様に、心より感謝申し上げます。